

「お前つ、どうしてここに!？」

「教えてもらったんだよ、あの人に」

床一面に散乱する割れた窓ガラスの破片と吸殻、スナック菓子とシンナーの袋、空き缶。

荒唐の様相を呈す殺風景な工場内に風に乗って火の粉が吹きこむ。

「あの人……」

ヒステリックに髪掻き巻るボルゾイの目に理解の光が点る。

「そうか、そういうことか、ははははははっなあんだわかった!!」

枝毛だらけの髪を振り乱し発狂したように笑い出すボルゾイにぎよっとする。

「あの人が言ってたお気に入りの二年つて、あれお前か!びつくりしたぜ、まさか優等生と評判のお固い麻生くんが専属契約ドレイとは衝撃だ、そうかそうか、ならここ知つても納得! フェエラ一回と引き換えに教えてもらったのか、ベッドで教えてもらったのか、あの人も口が軽いぜ、大事な大事な俺たちの秘密のアジトぼろつとこぼしちまつて……」

暴発、または起爆。

「ああッ、畜生ふざげやがって、おかげで台無しだ、漸くコイツを犯れるとおもったのに待った甲斐なしときた!!」

この前の美術室といい懲りずがいいところを邪魔しやがって、そんなにお熱か、他の男に犯らせたくないか、恐れ入ったね!! 全くよく出来たストーカーだよ秋山のピンチとなりや目の色かえて飛んでくるヒーロー見参見参ってかくそつたれが一人でカッコつけやがって、秋山も秋山だ、俺がこんなによくしてやってんのに麻生麻生馬鹿のひとつ覚えみてえに……」

窓から火の粉を伴う熱風がふきこみ髪をひっかきまわす。

麻生は平然と風を浴びて立ち、蔑みきつた目であたりを威圧し、呟く。

「燃えたいなら燃えりやいいさ」

投げやりな口調、淡白な表情、全てに無関心な態度。

俺が知る麻生そのもの、いつそ場違いなほど沈着な態度。麻生の服装。裾が膝まである、フェイクファー付きの黒いコート。

シャツにジーンズのカジュアルな私服を見慣れているとひどくスタイリッシュで斬新に映る。

体躯に沿ったスリムなコートは似合っているが、黒一色の不吉なコーデイナーは死刑執行人の正装さながら断罪の炎に映える。

火刑法廷の開幕。

裁判官と処刑執行人を兼ねるのは麻生、証人は俺、被告は

ボルゾイとその他大勢。

傍聴席なんて上等な物はない、ここは即席の法廷だ。裁判官も処刑執行人も証人も被告も平等に立ち見だ。

「……………あ……………」

頭のとつぺんから爪先まで冷徹な視線にさらされ裸足で駆け出した理性が戻ってくる。

自分がどんなかつこをしているか思い出し、恥辱で顔が燃える。

そのまま俯けば剥き出しの腹と股間がいやでも目に入り、咄嗟に横を向く。

パーカーの裾をはだけ、白濁が散った下腹から貧弱に薄い胸板まで大胆に露出し、ほとんど半裸に近い姿でボルゾイに抱かれてる。

「見んな！」

手錠を嵌められた両手で下腹を覆うも、ボルゾイがそれを払う。

「見ろよ、麻生。お前の可愛い秋山のエロいかつこ。興奮しね？」

ねちっこい揶揄が耳朶をねぶる。

剥き出しの背中にボルゾイが密着、長い舌が耳をなぞっていく。

俺の耳を唾液でべとべとにし穴をほじくり、片手を前に回

して胸板をまさぐる。

「さわるんじゃねー変態、この露出狂、茶番はおしまいだ、とつとと手錠はず……………ひっ!?」

乳首がちぎれる激痛に体を折って悶絶、声にならない悲鳴が嗚咽と混じって喉で沸騰する。

ボルゾイが俺の乳首を弾き、安全ピンを摘み、缶のプルタブでも引くみたいに引つ張ったのだ。

針で刺し貫かれた乳首にじわり血が滲む。

反応を面白がり、強弱を付け安全ピンを弾き、引つ張る。そのたび悲鳴を上げ身悶える。

「見ろよ、コイツの乳首下とおそろいでキレイなピンク色なんだ。そそのるだろ？ 血が出て……………赤く……………尖りきってる。貞操帯代わりの粹なアクセサリーだ。ピアッシングだよ、ピアッシング。俺という飼い主がありながら他の男にもケツ振る悪い子にはおしおきしなきゃな」

「だれが、飼い主、だよ……………犬扱いすんじゃねえ……………ボルゾイのくせに」

痛すぎて舌が縫れる。目尻に涙が滲む。

安全ピンが肉を抉る。

肉の中で針が動き、鋭い痛みを生む。

ボルゾイが唾で湿した指で乳首をコリコリ揉み転がす。

安全ピンの上から―痛い―脳裏で赤い閃光が膨らみ炸裂、

口から悲鳴が迸るー痛覚が焼き切れるー
痛いだけじゃない、理性も飛ぶ激痛の中に甘い刺激が隠れている。

ボルゾイが俺の胸をまさぐり、敏感な突起をねちっこく摘んで揉んでくりかえすごと、微電流に似た性感が覚醒する。

「はあつ、は、はつ……痛ッ、いい加減にしろ……調子にのつてると、後で……」

「後で？ どうしてくれるのかな？ ほら顔上げろ、コリコリ乳首もまれて感じまくってるエロい顔おともだちの麻生クンに見せてやれ」

無理矢理顎を掴み上げさせられる。

前屈みの姿勢から正面の麻生を仰ぐ。

やめろ、見るな、頼むから見ないでくれ。どうしちまったんだ俺は、体が熱を持って余して疼く、ボルゾイの手なんかでー……どうして……麻生が見てるのに……

無気力に四肢を投げ出す。

ボルゾイが優越感に酔いしれ腕を振りぬく。

「なんだかわかるか」

放物線を描き麻生の足元に落下したのは……さつきまで、俺の体内で暴れ続けていたローター。

今だスイッチが入ったまま、コンクリートの床で低い電動

音を発し続けている。

「さつきまで秋山のケツン中に入ってた。ローションでぬるぬるしてんだろ。さわってみろ、まだあつたかいぜ。ぐちやぐちやのどろどろだ。すごかったんだぜ、コイツ。入ればなし、イキっぱなし。目隠しされて……手錠で吊られて……腰揺すって……さつきまでうるさくて大変だった。頼むこれとつておかしくなる腹苦しい、あつ、ひあつ、おかしくなつちまうつ、頭が変になる、ごめん謝るだから手錠はずしてこれとつて伊集院ーって、顔中涙と汗と鼻水でべとべとにして泣き叫んでさあ。ケツの穴もがばがばにゆるみきつて……」

太股に固く熱いものが当たる。

腰を浮かし身をよじりケツを狙うそれを遠ざけるも、ボルゾイは俺の膝を器用にこじ開け、胡坐をかけた自分の上に座らせようとす。

「ローターは気に入ったか？ 気に入ったならまた持ってきてやる、遠慮すんな、家にいっぱいあるんだ」

安全ピンに指が絡む。引っ張る。悶絶。

前屈みに突つ伏す、手錠で括られた手で床を搔く、搔き巻る、塩辛い涙を嘔み締める。

嫌だ、こんな所、こんなかつこ悪くて恥ずかしいところ麻生に見られたくない幻滅かつこ悪い、恥ずかしい、ボルゾ

イが俺の胸をまさぐって乳首を抓って、嫌だ「あつ」俺の
声? 「んっ、く」 「こんな」

「お前は」
麻生が静かに口を開く。

コートのポケットに片手を入れたまま、炎の陰影が舐める
床に立ち尽くし、レンズの奥から冷えきった目を注ぐ。

「殺しときやよかつたな」

ゴミを捨て忘れたみたいな口調だった。

麻生がローターを蹴り上げる。

無造作に蹴り上げたローターは放物線を描きボルゾイの眉
間を直撃、ボルゾイが「ぎゃあつ」と絶叫、割れた額から
血が滴る。

今だ。

拘束がゆるんだ隙に必死に身を振りボルゾイの腕の中から
抜け出し、膝と肘で這って逃れる。

ボルゾイの額はぱっくり裂け、傷口から鼻梁に沿って血が
迸っていた。

眉間から顎先まで二分分する血の筋が、憤怒と苦痛に歪む
醜悪な形相をより凄惨に染め上げる。

「……………ろしてやる……………」

犬歯を剥いて喰る。

「あの人のお気に入りだろうが知るか、殺してやるよ麻生、
俺の邪魔はつかしやがって……………前から気に食わなかつたん
だ!!」

鉄骨を組んだ高い天井と、鉄骨を打ち立てた広大な空間に
殷々と絶叫が響く。

「いいのか勝手に決めて」

「あの人のお気に入りなんだろ」

残りのメンバーがおずおずと意見を申し立てるも、ボルゾ
イは動じない。

「どのみちここ知られたら口封じしね」と……………いや、わかっ
た、そうか。はははっ、そうか、あの人は俺たちに口封じ
まかせたんだ!」

「え?」

「考えてもみろ、いくらお気に入りだからってあつさりア
ジトを教えるもんか、俺たちがいるって知ってて一人で来
させたってことは……………好きにしていってことだ、口封じ
を兼ねてたつぷり遊んでやれってことだ、ちがうか!」

ボルゾイの目が狂気に濡れる。男達が生唾を呑み、嗜虐的
に唇をなめ、麻生を取り囲む。

工場内に殺気が充満する。

ボルゾイの言葉に触発され、まるで催眠術にかかったよう

に理性を手放した男たちが、包囲の輪の中心にじりじりと麻生を追い詰めていく。

「麻生!!」

叫ぶ、自分が置かれた状況も忘れて。

俺も、俺だつて麻生の心配をしてる場合じゃねえ。だけど、目と鼻の先で友達が危険な目に遭つてるのにじつとしてられない。

発作的に駆け出そうとして、立ち上がった途端に膝が笑い、二・三步よろめいてけつつまずく。

足が繻れ、埃を舞い上げ倒れこむ。

膝が言う事を聞かない。

腰がだるい。

手錠されてるせいで歩行のバランスがとりにくい。

どうして麻生がここに？ 俺が捕まつてるのがわかつて？

『あの人に教えてもらつた』あのやつてだれだ、ボルゾイと共通の知り合いか、俺の拉致を仕組んだ黒幕か『あの人のお気に入り』ボルゾイと麻生はあの人を介して繋がつて
いる……?」

悠長に推理してる場合じゃねえ。

麻生は無防備にその場に立つてる。武器を持つてる形跡はない。コートの中に隠し持つてるのか？

あざやかな反撃を期待し息を詰めるも、予想は外れた。

正面に陣取つたボルゾイが顎をしやくる。

唇ピアスの肥満が麻生の後ろに回り羽交い締めにする。

無防備に身を晒した麻生を悪意の波動が取り囲む。

ボルゾイが小声で指示し、パンクに場所を譲り、そして……

「かはっ!!」

鈍い音、鳩尾に重い衝撃。